

実数  $a, b, c$  に対し,  $g(x)=ax^2+bx+c$  を考え,  $u(x)=g(x)g\left(\frac{1}{x}\right)$

で定義する。

- (1)  $u(x)$  は  $y=x+\frac{1}{x}$  の整式  $v(y)$  として表されることを示せ。  
 (2) 上で求めた  $v(y)$  は  $-2 \leq y \leq 2$  の範囲のすべての  $y$  に対して  $v(y) \geq 0$  であることを示せ。

< '00 慶應義塾大 >

【戦略1】

- (1)  $u(x)$  の正体は  $(ax^2+bx+c)\left(\frac{a}{x^2}+\frac{b}{x}+c\right)$  です。

これを展開して整理すると

$$a^2+b^2+c^2+ab\left(x+\frac{1}{x}\right)+bc\left(x+\frac{1}{x}\right)+ca\left(x^2+\frac{1}{x^2}\right)$$

となり,  $y=x+\frac{1}{x}$  とおくことで,  $y$  で表せる見通しが立ちます。

$$x^2+\frac{1}{x^2} \text{ は } x^2+\frac{1}{x^2}=\left(x+\frac{1}{x}\right)^2-2 \text{ と見て, } x^2+\frac{1}{x^2}=y^2-2$$

と  $y$  で表せるという基本です。

これにより,

$$\begin{aligned} u(x) &= a^2+b^2+c^2+aby+bcy+ca(y^2-2) \\ &= cay^2+b(c+a)y+a^2+b^2+c^2-2ca \end{aligned}$$

というように,  $y$  の整式(今回は2次式)で表せることになります。

- (2)  $v(y)=\dots=\square \geq 0$  と最後の「よって  $\geq 0$  !!」というための根拠としては(実数)<sup>2</sup>という形が根拠となるのでしょう。

そこで,  $v(y)=cay^2+b(c+a)y+a^2+b^2+c^2-2ca$  を

平方完成

していきます。

$a, b, c, y$  のどの文字についても2次ですが, せめて最高次の係数が1であり, 降べきの順に直した際に係数が簡単となりそうな  $b$  について整理していきます。

$v(y) \geq 0$  を示せと言われているからといって  $y$  について整理しなければならぬ理由はどこにもありません。

【解1】

$$\begin{aligned} (1) \quad u(x) &= (ax^2+bx+c)\left(\frac{a}{x^2}+\frac{b}{x}+c\right) \\ &= a^2+b^2+c^2+ab\left(x+\frac{1}{x}\right)+bc\left(x+\frac{1}{x}\right)+ca\left(x^2+\frac{1}{x^2}\right) \\ &= a^2+b^2+c^2+aby+bcy+ca(y^2-2) \\ &= cay^2+b(c+a)y+a^2+b^2+c^2-2ca \end{aligned}$$

ゆえに,  $u(x)$  は  $y\left(=x+\frac{1}{x}\right)$  の整式として表される。

$$\begin{aligned} (2) \quad v(y) &= cay^2+b(c+a)y+a^2+b^2+c^2-2ca \\ &= b^2+y(c+a)b+cay^2+c^2+a^2-2ca \\ &= \left\{b+\frac{y(c+a)}{2}\right\}^2-\frac{1}{4}y^2(c+a)^2+cay^2+(c-a)^2 \\ &= \left\{b+\frac{y(c+a)}{2}\right\}^2+(c-a)^2-\frac{y^2}{4}\{(c+a)^2+4ca\} \\ &= \left\{b+\frac{y(c+a)}{2}\right\}^2+(c-a)^2-\frac{y^2}{4}(c-a)^2 \\ &= \left\{b+\frac{y(c+a)}{2}\right\}^2+\left(1-\frac{y^2}{4}\right)(c-a)^2 \\ &= \left\{b+\frac{y(c+a)}{2}\right\}^2+\frac{4-y^2}{4}(c-a)^2 \\ &\geq 0 \quad (\because \text{条件 } -2 \leq y \leq 2) \end{aligned}$$

【戦略2】(2)について

$x + \frac{1}{x} = y$  という関係から,  $x^2 - yx + 1 = 0$  という関係式が成り立ちます。

そもそも  $v(y)$  の出どころである  $u(x)$  という式の値が0以上であることを示すわけです。

この  $u(x)$  は  $g(x)g\left(\frac{1}{x}\right)$  という形ですが,  $x^2 - yx + 1 = 0$  を満たす  $x$  は  $-2 < y < 2$  であれば虚数です。(判別式から示せます)

よって,  $x^2 - yx + 1 = 0$  を満たす  $x$ , 及び共役な複素数  $\bar{x}$  に対して

解と係数の関係から  $x\bar{x} = 1$  を得られ,  $u(x) = g(x)g(\bar{x}) = |g(x)|^2 \geq 0$

となるため解決です。

$y = \pm 2$  のときは個別検証します。

【解2】(2)について

$x + \frac{1}{x} = y$  より,  $x^2 - yx + 1 = 0$

[1]  $y = 2$  のとき

$$x^2 - 2x + 1 = 0 \Leftrightarrow (x-1)^2 = 0 \text{ だから, } x = 1 \text{ であり,}$$

$$\begin{aligned} v(2) &= u(1) \\ &= g(1)g\left(\frac{1}{1}\right) \\ &= g(1)^2 \\ &\geq 0 \end{aligned}$$

[2]  $y = -2$  のとき

$$x^2 + 2x + 1 = 0 \Leftrightarrow (x+1)^2 = 0 \text{ だから, } x = -1 \text{ であり,}$$

$$\begin{aligned} v(-2) &= u(-1) \\ &= g(-1)g\left(\frac{1}{-1}\right) \\ &= g(-1)^2 \\ &\geq 0 \end{aligned}$$

[3]  $-2 < y < 2$  のとき

$x^2 - yx + 1 = 0$  を満たす  $x$ , 及び共役な複素数  $\bar{x}$  に対して

解と係数の関係から,  $x\bar{x} = 1$  であり,  $\frac{1}{x} = \bar{x}$

$$\begin{aligned} v(y) &= u(x) \\ &= g(x) \cdot g\left(\frac{1}{x}\right) \\ &= g(x) \cdot g(\bar{x}) \\ &= (ax^2 + bx + c)(a\bar{x}^2 + b\bar{x} + c) \\ &= (ax^2 + bx + c)(a\overline{x^2 + bx + c}) \\ &= |ax^2 + bx + c|^2 \\ &\geq 0 \end{aligned}$$

【戦略3】(2)について

$-2 \leq y \leq 2$  ということから

$$y = 2\cos\theta$$

とおいてしまうのもよくやる技です。

流れは【戦略2】、【解2】とほぼ同様です。

【解3】(2)について

$-2 \leq y \leq 2$  の範囲の  $y$  に対しては,

$$y = 2\cos\theta \quad (0 \leq \theta < 2\pi)$$

と表せる。

このとき,  $x + \frac{1}{x} = 2\cos\theta$  より,  $x^2 - (2\cos\theta)x + 1 = 0$

すなわち,

$$\begin{aligned} x &= \cos\theta \pm \sqrt{\cos^2\theta - 1} \\ &= \cos\theta \pm \sqrt{-\sin^2\theta} \\ &= \cos\theta \pm i\sin\theta \end{aligned}$$

ゆえに,  $|x| = 1$  であるため,  $|x|^2 = 1$ , すなわち  $x \cdot \bar{x} = 1$

よって,  $\frac{1}{x} = \bar{x}$

このとき,

$$\begin{aligned} v(y) &= u(x) \\ &= g(x) \cdot g\left(\frac{1}{x}\right) \\ &= g(x) \cdot g(\bar{x}) \\ &= (ax^2 + bx + c)(a\bar{x}^2 + b\bar{x} + c) \\ &= (ax^2 + bx + c)(a\overline{x^2 + bx + c}) \\ &= |ax^2 + bx + c|^2 \\ &\geq 0 \end{aligned}$$

【戦略 4】

$v(y)$  を  $y$  の式と見て押し通す方針も当然考えられます。

ただ、その場合、 $y^2$  の係数である  $ca$  の符号が定まっていないため、

$$v(y) = ca \left\{ y + \frac{b(c+a)}{2ca} \right\}^2 + \dots$$

と平方完成そのものには劇的な効果はなさそうです

$$-2 \leq y \leq 2 \text{ の全ての } y \text{ に対して } v(y) \geq 0$$

という絶対不等式の考え方に基づき、

$$-2 \leq y \leq 2 \text{ における } v(y) \text{ の最小値が } 0 \text{ 以上}$$

ということを目指していきます。

【解 4】(2) について

$$v(y) = cay^2 + b(c+a)y + a^2 + b^2 + c^2 - 2ca$$

$$= ca \left\{ y^2 + \frac{b(c+a)}{ca}y \right\} + a^2 + b^2 + c^2 - 2ca$$

$$= ca \left\{ \left( y + \frac{b(c+a)}{2ca} \right)^2 - \frac{b^2(c+a)^2}{4c^2a^2} \right\} + a^2 + b^2 + c^2 - 2ca$$

$$= ca \left( y + \frac{b(c+a)}{2ca} \right)^2 - \frac{b^2(c+a)^2}{4ca} + a^2 + b^2 + c^2 - 2ca$$

$$= ca \left( y + \frac{b(c+a)}{2ca} \right)^2 - \frac{1}{4ca} \{ b^2(c+a)^2 - 4ca(a^2 + b^2 + c^2 - 2ca) \}$$

$$= ca \left( y + \frac{b(c+a)}{2ca} \right)^2 - \frac{1}{4ca} \{ b^2(c+a)^2 - 4ca \{ (c-a)^2 + b^2 \} \}$$

$$= ca \left( y + \frac{b(c+a)}{2ca} \right)^2 - \frac{1}{4ca} \{ b^2 \{ (c+a)^2 - 4ca \} - 4ca(c-a)^2 \}$$

$$= ca \left( y + \frac{b(c+a)}{2ca} \right)^2 - \frac{1}{4ca} \{ b^2(c-a)^2 - 4ca(c-a)^2 \}$$

$$= ca \left( y + \frac{b(c+a)}{2ca} \right)^2 - \frac{1}{4ca} (c-a)^2 (b^2 - 4ca)$$

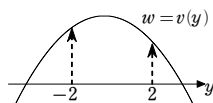
また、 $y = \pm 2$  のとき、 $x = \pm 1$  (複号同順) であり、

$$\begin{aligned} v(2) &= u(1) & v(-2) &= u(-1) \\ &= g(1)g\left(\frac{1}{1}\right) & &= g(-1)g\left(\frac{1}{-1}\right) \\ &= g(1)^2 & &= g(-1)^2 \\ &\geq 0 & &\geq 0 \end{aligned}$$

であることに注意する。

[1]  $ca < 0$  のとき

$w = v(y)$  のグラフは上に凸の放物線であり、



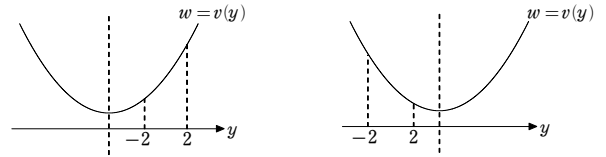
$w = v(y)$  の  $-2 \leq y \leq 2$  における最小値は  $v(2)$  または  $v(-2)$

いずれにせよ、 $-2 \leq y \leq 2$  における  $v(y)$  の最小値は 0 以上であり、

$$-2 \leq y \leq 2 \text{ において } v(y) \geq 0$$

[2]  $ca > 0$  のとき

[2-1]  $-\frac{b(c+a)}{2ca} \leq -2$  または  $2 \leq -\frac{b(c+a)}{2ca}$  のとき

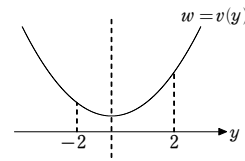


$w = v(y)$  の  $-2 \leq y \leq 2$  における最小値は  $v(2)$  または  $v(-2)$

いずれにせよ、 $-2 \leq y \leq 2$  における  $v(y)$  の最小値は 0 以上で、

$$-2 \leq y \leq 2 \text{ において } v(y) \geq 0$$

[2-2]  $-2 \leq -\frac{b(c+a)}{2ca} \leq 2$  のとき



$-2 \leq y \leq 2$  における最小値は  $-\frac{1}{4ca} (c-a)^2 (b^2 - 4ca)$

ここで、 $-2 \leq -\frac{b(c+a)}{2ca} \leq 2$  より、 $\left| \frac{b(c+a)}{2ca} \right| \leq 2$

$ca > 0$  に注意すると、 $|b(c+a)| \leq 4ca$

再び  $ca > 0$  より  $c, a$  は同符号であるため、 $|c+a| \neq 0$  だから

$$|b| \leq \frac{4ca}{|c+a|}$$

ゆえに

$$\begin{aligned} b^2 - 4ca &\leq \frac{16c^2a^2}{(c+a)^2} - 4ca \\ &= \frac{16c^2a^2 - 4ca(c+a)^2}{(c+a)^2} \\ &= \frac{4ca \{ 4ca - (c+a)^2 \}}{(c+a)^2} \\ &= \frac{-4ca(c-a)^2}{(c+a)^2} \\ &\leq 0 \end{aligned}$$

よって、 $-\frac{1}{4ca} (c-a)^2 (b^2 - 4ca) \geq 0$  であり、 $-2 \leq y \leq 2$  における  $v(y)$  の最小値は 0 以上であり、

$$-2 \leq y \leq 2 \text{ において } v(y) \geq 0$$

以上 [1], [2] から、 $-2 \leq y \leq 2$  において  $v(y) \geq 0$  が成り立つ。

【総括】

$x, \frac{1}{x}$  についての対称式である式を「相反式」と言い、特に  $x + \frac{1}{x}$  という相反式については、 $x > 0$  の範囲において、相加平均・相乗平均の関係から

$$x + \frac{1}{x} \geq 2\sqrt{x \cdot \frac{1}{x}} = 2$$

ということが言えます。

$x + \frac{1}{x}$  は奇関数であることから、

$$x < 0 \text{ の範囲においては } x + \frac{1}{x} \leq -2$$

です。

つまり、普通に考えたら  $y \leq -2, 2 \leq y$  のはずですが。

しかし、条件で与えられているのは  $-2 \leq y \leq 2$  です。

このあたりに違和感を感じ取り

複素数としての処理

を意識できると、【解2】や【解3】が現実味を帯びてくるでしょう。

$v(y)$  を  $y$  のまま見て押し通す【解4】は思いつきやすいと言えば思いつきやすいのですが、結構腕力が必要で、腕力不足で撤退してしまいやすい路線でしょう。